

日本現代文學全集 1

明治初期文學集

編集 伊藤 整・龜井勝一郎・中村光夫・平野 謙・山本健吉

講談社

日本現代文學全集

1

明治初期文學集

編集

伊藤 整
龜井 勝一郎
中村 光夫
平野 謙
山本 健吉



初版 第1刷
昭和44年12月20日
増補改訂版 第1刷
昭和55年5月26日

著者
假名垣魯文 彩霞園柳香
成島柳北 三遊亭圓朝
服部撫松 河竹默阿彌
岡本勘造 饗庭篁村

装幀 蟹江征治

發行者 野間省一

發行所 株式會社 講談社

印刷 大日本印刷株式會社
製本 大製株式會社

東京都文京區音羽 2-12-21

郵便番號 112

電話東京03 (945) 1111(大代表)

振替東京 8-3930

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします

Printed in Japan

0395-106011-2253 (1)

(文1)

明治初期文學集 目次

卷頭寫眞

筆蹟

岡本勘造

夜嵐阿衣花迺仇夢……………一六九

假名垣魯文

彩霞園柳香

安愚樂鍋……………五

蓆簾群馬嘶……………二五

成島柳北

三遊亭圓朝

柳橋新誌……………三

牡丹燈籠……………三九

服部撫松

河竹默阿彌

東京新繁昌記……………九

島衛月白浪……………三九

饗庭 篁村

當世商人氣質……………三六

作品解說……………稻垣達郎 四六

明治初期文學入門……………成瀬正勝 四五

年譜……………四四

參考文獻……………四三

假名垣魯文篇

[illegible]

牛店 安愚樂鍋
雜談

牛店 安愚樂鍋初編自序



世界各國の諺に。佛蘭西の着倒れ。英吉利の食たふれと。食臺に並べて譜ど。衣は肌を覆ふの器。食は命を繋ぐの鎖。心の狼の煮馬止て。咲いた櫻の花より團子。色則是食色氣より。餐氣を前の佳味肉食。牛にひかれて膳好方便。佛徒家の五戒さらんバア。虚と實の内外を西洋風味に素混て。世に克熟し甘口とは。作者が例の自己味噌。家言もあしの不果放行。彼小便の十八町。慢と地急案即席調理。刻葱の五分ほども透ぬ測量のタレ挨拶。牛肉の



替りは後輯にして。一帙端を採給へと。文明開化開店の。告條めかして演述になん
明治四歲辛未の卯月初の五日
東京本石街萬發閣の隠居に於て

牛の煉藥 黒牡丹の製主

假名垣魯文題



標目從初編至貳編

○西洋の好聴取
○墮落の廊話
○鄙士の獨盃
○野間の詔言
○諸工の俠言
○生人の會談
○商人の胸會計
○醫者の不養生
○文盲の無茶論
○半可の浮世談
○人車の引力
○話家の樂屋落
是に洩れたるは兩編に著すべし

牛店 安愚樂鍋初編全 一名 奴論建

東京市隱 假名垣魯文戲著

開場



に福澤の著たる肉食の説でも讀せてヘネモシ西洋にやアそんなことは
 故ウせん。さういふことをいふに、彼土はすべて理でおして行國
 がらだから蒸氣の船や車のしかなんざアおそれいたもんだ。ネ既
 にごらうじろ傳信機、針の先で新聞紙の銅板を彫たり、風船で空から
 風をもつてくる工風は妙じやア。ごうせんかあればネモシ斯い譯で
 ごぜヘス地球の圖の中に暖帶と書てありやす國があるが、ネ彼所が赤
 道といつて日の照りの近イ土地だからあつて、ことはたまらねヘそ
 で以テ國の人が日にやけて皆なくろん坊サ。それだからその國の王が
 いろ／＼工風をして風船といふものを造つて大きな圓い袋の中へ風
 をはらませて空からおろすと、そのふくろの口をひらきやすネ。する
 と大きなふくろへ一ぱいはらませてきた風だから、四はう八方へひろ
 がつて國の内がすくなく、といふ工風で、ごすまだ奇妙なことがあ
 りやす。魯西亞なンぞといふ極寒い國へゆく、と寒中は勿論夏でも雪が
 降つたり氷が張ので、往來ができやせん。そこで彼蒸氣車といふものを
 工風しやしたが、感心なものサネ。一體蒸氣車と云ものは、地獄の火の車
 から考出したのださうだが、大勢をくるまへて、せて車の下へ火筒をつ
 けて、そのなかで石炭をどん／＼焚からくるまの上に乗てゐる大勢は
 寒氣をわすれて、遠道の通行がで
 きやせう。ナント考へたものサ
 ネ。何サこのく
 れへな工風は、彼
 土の徒はちやぶ
 く前でげス。此
 大千世界の形象
 せへ渾沌として



るが如しと考へたはサ。その以前は釋迦如來が須彌山と号けたとこ
 ろが西洋人はまん／＼たる海上を渡つて世界の果からしてまでを見
 きはめたのだから、釋迦坊も後悔したさうサ。そこで以て海をわたる工
 風を西洋じやア後衛衛といひやすは、ナヲヤモウ御歸路かハイさや
 うならヲイ／＼ねへさん生で一合。葱も一處にたのむ／＼

○墮落個の廓話

▲年は二十四五いゝなましろくあたまのかみはたくさんにいてうにゆひはなしの國
 てうまがひおめしのあみぢんの小そで一ツどう着はさだめし女の物をなほしたりと
 おもはれ二三日あつてば、ぼんやりしたすがた、きよしきに見せるたなりぎんぐさ
 十六ぼんのたばこいれしやうのあやしきに、しちどきやちよしんばりのきせるねつげは、ぞう
 げのかみふたにこれと、仕入れものとみへたりと、き／＼うでをまくりて、でまのりのぎ
 んかな具をひけらかして、これとふたりさしつおさへつのみか、目のふちをあかくして、きろ
 いこゑをた「半ちやんゆふべの世界はおいらは、じつにふさいだヨ。彼樓
 へは三四たび登樓たことのあるのだから、けんのだといふのに、竹坊
 がむやみにあがらうといふから、おめへは一件の處へ脱走してしま
 うし。おいら一人ほかへあがるのもおもしろくねへから、野面であがりこ
 んだところが、あひにくと二會までいつた遊女がおいらに出ツくわ
 せたらうじやアねへか。こいつは不見識だ、とおもつたけれど、ひきつけれ
 と、きごまかし、わきを向いてゐ
 たから、お茶屋が
 氣をきかして、へ
 イおめし、かへト
 はやく切あげた
 ので、その場はき
 りぬけたが、番新
 めがおいらの顔
 を見おぼへてゐ

やアがつて。ひけて座しきへ這入とすぐにモシエぬしやアよくきなました人がわるウざんすヨこれサお茶屋の人このきやくじんは跡の月の三日に田町の辨天平野から三人一座で二會に來なましたお客だますヨト敵にこゑをかけたれたからうしろを見せるのも外聞がわるいとおもつたが馴染金散財にやア代られねへこれをきくがいなや小便にいつて。その歸り足にはしごをトン。はきものヲトみづからこゑをかけて茶屋の女を。おきざりまいねんさつサとござれやといふ身で飛出して茶屋まですたく歸つたところが女中が跡から追ツかけて來てなにかお氣にさはつたことでもございましたかは。エ、コウ。いゝじやアねへか。ダガノおいらのやうに年びやく年中吉原へ計りはいいこんでゐちやアかほがわるくなつてさきがこわがつて相手にしねへから嶋ばらへでも巢をかへやうとおもつてゐるのサなんだツても丸三年といふもの一トばんもかゝしたことがあるめへじやアねへかそれだから實榎樓のことばの「かうなんしあゝなんし」から鶴泉の「くされてゐる」「だしきつてゐる」平泉じやア客を古風にぬしといひサ「なんだます」「ちれツてへ」といふこととから松田屋のつ字ことば。角ゑびのはやことに岡本の「くるはヨ」「ゆくはヨ」金瓶大黒じやア「あゝやだヨ」といふことばを禁じられたし尾彦の朝のむかひのはやいのヤ大文字屋の氣のかるいの。伊勢六の大見識の内ゆるみまでを知ツて居るシ。岡田屋のおいらんたちは傾城水滸傳の種本で甲子屋のしん造衆が客のくるかこねへかを茶屋に念をおすことまでしやうちしちやア樂屋が見どほしで客になつてもおもしろいあそびはできねへからずつと世界を見やぶつて新造買もして見たが次の間あそびはがうせい氣ほねのをれるものだしいまの壯年サにあんまり老人じみるからそれも廢して藝者と出かけたが組で八十疋はつどかねへ。うら茶屋はいりの汐待もたいぎだからグツト色氣を去ツて幫間を買ツてあそんでも見たが彼奴等はど



も友を呼でならねへヨ此あひだも新孝をさそツて金子へ夕飯を喰ひに行とあとから尾代壽に正孝序作露八なんぞといふ流行ツ子がかくくとおしこんで來てかけがへのねへ大椿幣をとう一枚こすらせられたぜモウくなかはごめん。しかし今夜は廊の名残に。彼一件の處へ出かけるつもりだが。もうひとばん附合ふべしサなに又株ダ。イヤサ實にこんやで根ツきり葉ツ切りほんとうにこれぎりく扱おてうしもおつもりダ

○鄙武士の獨盃

▲としごろは三十ばかりいゝあまくでくろくあたまは自びんのくきたねもつともそうがみの火のつきさなだれがみくろもんのもんつきとんつくぬの子に小くらのよどれくさつたるかまうちかき一ばんがたなのつかのよれをいふかあるひはつかいのほれをかくさくさんためかしるもめにでぐるくとまきつけつんつるてんのきものをうでまくりしてしやにかまへよほどあひやがまはりしと見へたりはしのさきにたれつきたるさ二ばんつかみて手びやうしをうちながら大ききなどすごゑにて。詩「衣は軒にいたりイそではア腕にいたるウ腰間秋水。鐵を斷べし。人觸れば人を斬。馬ふるれば馬をきるウ。十八交をむすぶ健兒の社。ア引。是やく女子酒エもてこずかい。こやくそしてナ生の和味のをいま一皿くれんカ。ア、愉快じやく。となりにあたるさむらひをじろり見やりくつしたるハア失敬ごめんコヤ女子なにを因循してをるか勉強して神速にせい。さいわひにならうちむかひ。君牛肉は至極御好物とするさつ

ウ仕るが僕なぞも誠賞味いたすでござるイヤかゝる物價沸騰の時勢に及んで割烹店などへまかりこすなんちふ義は所謂激發の徒でござる此牛肉チウ物は高味極まるのみならず開化滋養の食料でござるテ。イヤ何かとまうして失敬。御めんコヤ〜女子一寸來ンコヤ。あのうナ生肉をナ一斤ばかり持参いたすンで。至極の正味を周旋いたてくれイヤ、酩酊きはまつたヲ、生肉かゝるは會計はなんぼかじんくへ愉快きはまる陣屋の酒系ん中にますら雄美少年引トはなうたをうたひながらあら〜しくかたを女子またくるぞのがら〜おもてへたていウタへしきしまのやまとごころを人とはダア、ゝゝゝ、あさひにイ匂ふウ山さくら花ア、ゝゝゝ、引

○野幫間の詔誤

▲としごろは三十二三かほほそなくせいひのひよりりとしたをとこあるみぢんのおめしおちりめんたうざらさはへりばかりの下下着にそろへきぬちうみのくりうめにそめたはまがひさく五つところをもんをつけしうはかたのふながうしりのつよいおびをそめたはりたる古風なごいけきせは石碁ばりのてんぶらなりとき。〇つればかれてといひのきや内あたりでゆきあひつりのづ八「モシ若旦那どうでげスこのせつはでへぶまきてはなれぬやうす」のづ八「モシ若旦那どうでげスこのせつはでへぶ柳橋邊でおかれすぢやアござへせんかエ、モシあまりまよはせすぎるに罪になりやすぜ柳のすぢは誰でござへスはくじやう〜ヲツト忘れたり〜二三日めへに嶋原の晩花から飛札到來すなはちたねは爰に有馬の人形筆ツ〜しくふみをだしてみせかけ。エモシあの娼妓はあなたにやアつとめをはなれた仕うちでげスズイエサ油をかけるなんぞといふのはひととほりのお客でげスあなたと拙がその中のはきのふやけふのことじやないツマアおきゝなせへし此間内證の千應さん名をしかいふの俳へ甘海宗匠からの傳言をたのまれやししたから一寸顔を出したつひでに樓上へ參つたところが私を見るとおいらんが野圖八さん浮さんと同伴かへと次の間へかけだしてきなすツたから私が

いちばんだまをくらはせてへイ浮さんはいませめや〜請元榮庵の宅へ寄ておいでなさるからすぐに跡からモシおいらん御愉快。なんぞお饗應なさいと十八番の鏡をきめるとア、まつてくんやなヨとなにかそは〜しながら新造しゆうに耳とすりサ私は尾車さんや連山さんのところをまはつてくるうちに金花樓の琉球味たつぷり手形の「びいる」が一ぼんとあらはれやした。ところでしやア〜と御馳走てうだいの間がおよそ西洋時計一字三ミニウトばかりのひまだから娼妓の曰。のづ八さんうきさんはどうしなましたらうあんまりひまがとれるのだヨといはれてハツと胸にぐき露顯ぬうちこつちからきりあげ揚貝ちよん〜まて。ちよつから私がおむかひに。ゆきますさいづちたばねのし廊下とんびも羽をのしてスタ〜にげてきたさのサツサ。モシこんどはあなたとでもおとまでね〜と見つかりやアどんなめにあふかしれやせんヨア、あんまりしやベツて咽がひつゝくやうになりやしたいきつきにちやわんで一抔いたどき女郎衆はよい女郎衆チト時代だがヲツト、ゝゝゝ、ござへす〜。たくみなべのうしをむかしをしたへおき。わかだんなく〜ちよつとこらんなせへしとなり



はありやアたゞものじやアござへせんぞ。なんでも北里のお茶屋の妻君かさもなけりやア山谷堀あたりの船宿の女房かしらん堀じやア見かねへかほだだがど

うもわからねへツツとほりと云やア紫玉の處へ繪短冊を客さきからたのまれやしただから今戸の弁次郎へ風爐の注文ながら一昨日ちよつくらよりやしたら外を藝の有明樓行が二タ組ほど通りやす。たそやと見れば豈はからんモシそれ一件のネ。お猫サそいひつか大七からはしけて濱中やへ連出した藝サ。ホンニおめへさんほど罪作りなみやうりのわるいお方はござへませんぜ彼奴私を見ると紫玉の敷居をまたいで若だんなはどうなさいましたあれぎりじやアあんまりでスからモウーべん後生でございますヨとあたりをはぐかつて手をあはしてわかれやししたネモシあなたはどういふ腕を出して婦人をおころしなさるのでげス實にふしぎ妙でござへす。ア、おそれべく

○諸工人の俵言

▲としごろは四十ぐらゐ大工か左官らしきふうぞくしるしばんてんもひきはらかけ三尺おびはよこれたれど白木のそろばんぞめよばしながひのたばこいれにあつばけのしんちうぎせるかみはしのをたばねたごとくつれも同じくよになながらこのじんぶつはとしきさいいことにあにでしにてもあらんかと思はれたるはなしふりよこさあひがまはりしとみへてまきじつたのたか「エ、コウ松やきいてくれあの 勘次の野郎ほど附台のねへまねけは西東の神田三界にやアおらアあるめへとおもふぜまアかういふわけだきいてくりや夕邊仕事のことて八右衛門さんの處へつらア出すとてうど棟梁がきてゐて酒がはじまつてゐるシだらう手めへの前だけれどおらだつて世話やきだとか犬のくそだとかいはれてるからだゝから酒を見かけちやアにげられねへだらうしかたがねへからつツばへりこんで一杯やつけたがなんぼさきが棟梁でなくでもごちそうにばかりなツちやア外聞がみつともねへからさかづきをうけておいてヨ小便をたれにゆくふりでもてへ飛出して横町の魚政の處へ往てきはだのさしみをまづ壹分とあつらへこんで内田へはしけて一升とおごつたはおらアしらんかほの半兵へで歸へつてくると間もなく酒と肴がきた處から棟梁もうかれ出し



げい人のふりよをしやアがつて二上りだとか湯あがりだとか蛸坊主が湯氣にあがつたやうなつらアしやアがつて狼のとほほでさんざツばらさわぎちらしやアがつてそのあげ句が人力車で小塚原へおしだそうと成とかん次のしみツたれめへおさらばずあとかじをきめたもんだから棟梁も八さんもそれなりになつてしまつたがエ、コウおもしろくもねへ細工びんばう人だからだあのやらのやうに錢金ををしみやアがつて仲間附合をはづすしみつたれた了簡なら職人をさらべやめて人力の車力にでもなりやアがればいゝひとをつつけちとらア四十づらアさげて色氣もソツけもねへけれど附合とくりやアよるが夜中やりがふらうとも唐天ぢよくからあめりかのぼつたん國までもゆくつもりだアあいつらとは職人のたてがちがはゝ口はゞツてへいひぶんだがうちにはやア七十になるばゝアにかゝアと後兒で以上七人ぐらして壹升の米は一日ねへし夜があけてからすがガアと啼きやア二分の札がなけりやアびんばうゆるぎもできねへからだて年中十の字の尻を右へびん曲るが半商賣だけれど南京米とかての飯は喰ツたことがねへ男だあいつらのやうにかゝアに人仕事をさせやアがつてうぬは仕事から歸つてくると並木へ出てやすみにでつちておい

て新道の小美代をよんでこいとかなんとかいッたからたまらねへ藝妓が一枚とびこむと八右衛門がしらまで浮氣になつてがなりだすとノ勘次のやらうがいゝ



福じやから先生
が出て給はらな
ければ松山松塘
芦洲雪江東寧帆
雨柳隨庵桂洲
波山の諸先生た
ちが不承知じや
からぜひに出席
をねがふとわざ
／＼扇めん亭の

た應取なんぞヲならべて賣りやアがるのだアすツぽんにお月さま下駄にやき味噌ほどこちがふおしくんにさまだアぐず／＼しやアがりやアすのうてんをたゝきわつて西瓜の立賣にくれてやらアはばかりながらほんのこつたが矢でも鉄砲でもつてこいおそれるのじやアねへはへトひが／＼りやアいひたくなるだらうのウ松てめへにしたところがさうじやアねへか／＼い／＼あ／＼ねへ熱くしてモウ二合そして生肉もかはりだアはやくしろウエ、

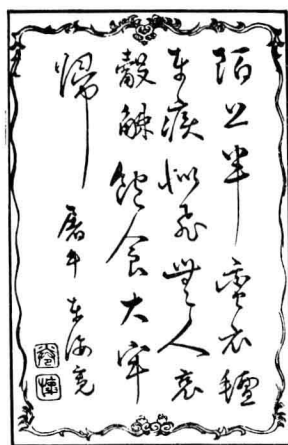
○生文人の會話

▲ちかごろうかうの書畫會れん中として三十二ぐらあやばなこしへ身なりもさのみわろきにはあらねど世を見やぶつたつもりにできるものも下さるゝひたるをいふくちもなくなきくろたのはおひらさきふともをむなだかにむすびてけんしきはなばしらとともにたかくたはらにたう紙のまきたると扇子のつかねたるをめりかざらきのふろしきにつゝみかけておき下タ地よほどさけたの匂いのあるはなまわやか萬八あたるの會くづれと見えはさそひてつれゆきたるたゞの人物とみえたりもつともをり／＼くとしへたへり「ア、けふの會はよわつた／＼あのやうに唐紙扇面の攻道具でとりまかれてはさすがの僕もがつかりだこれだから近頃はどのやうにまねかれても謝義ばかりもたせて書畫會へは出ぬことゝきめたがけふは南溟老人が長壽の筵といひ殊に南湖翁の三十三回の追

善公と廣小路の一庭が使者に來たので止を不得出かけたところが肴札五枚がけの一局へ合併して一杯のむが否やどうか先生おあとでねがひますと左右から扇面の鎗ぶすまさせてうるさいことだとギョツとしたがかねて期したことでア、是も會主への義理じやと観念して書畫の注文でも扇面が貳百疋唐紙なら五百疋と極札がついてある腕を一言の禮のみで先四五本かゝせられたと思ひなさい僕がからだの居まはりを雲霞のごとく取巻てお跡で一本どうか諸先生の合作でござりますから一寸ねがひますのヤレ遠國からだのまれました書畫帖だのとたちまち扇紙の山をなしたは實にうるさいはやく切あげて脱しやうと身じんまくをしてゐる寂中隣の方で生酔がけんくわをはじめた騒ぎで人々が奔走する間に早々下タへ來ると膳所に琴雅乙彦などいふ風流雄が内食をきめてゐるむかふの隅には諏訪町の松本がエ何サ楓湖先生がサ藝者の房八を合手に大なまゐひでこれから船で上手へ出かけるから是非附合とこまらせるので爰にも足をとめることがならんそれは偶の附合だから止を得ぬが明日は大藩の知事公から召されてお席に於て絹地三幅對の山水を即席にしたゝめんければならんからチトつきあひははずすじやが後日として尊公のそでをひいてぬけ出したがなにか吞たらんやうじやによつて牛店ときめたは中村のかまびすきところより落つてのめるから妙だてナ扱まつ春木氏の義理もすんだがエ、また來月の朔日は萬八で虛堂の展覽會二日がカウト寺嶋の梅隣亭で席畫の約速ア、うるさい／＼實に高名家には誰がしたモウ／＼名聞は廢すべし／＼ヲツト、／＼こぼれる／＼

牛店安愚樂鍋二編換序
權ん説

喘を問ふ宰相もあらず。羊にかへる王者もなし。大牢の滋味。煮燒て一鍋三百銅。角をぬかれ皮を晒され臍を乾さる。各國と交際は。汝を殺すが爲なら



ず。魯酒淡ふして
邯鄲園。更に災
を移されたるを哀
れむ。嗚呼天平時
乎。

芬兮成字題

西洋料理通販

黒牡丹

鴨の脛の短きも。鶴の脛の長きも。割煮の法を得。鹽梅の術を盡さば。豈憂ひ悲むことあらん哉。情惟るに。莊周が獻立。伊尹が會席は。板前の清く。姐箸の直にして。然も陰らぬ庖丁なれども。七五三代の古風に傾き。八珍九獻の當世に協はず。今哉外國の珍客。實際の佳宴をひらき。互市に盡す饗應も。萬里製を異にして。飲食の設け等類からず。然れども佳味の佳味たるは彼我同一なり。傳聞。我邦未開闢ざるとき。渾沌たる鶏の卵を。蟻黃わろしとして食せざるも。盛運星霜を経て進。清露は澆けとなり。濁れる壳は肉種となり。山海の珍味咄嗟に辨じ。精飯咽に煩く美食口に飽て遠く西洋の佳味を鉢。遙に彼土の調理を學ぶ。善隣の徳大なる哉。偉なる哉。されば馬乗を畜ふ者も。鶏豚を屠り。伐氷の家にも牛羊を畜ひ。鶏を割に牛刀を用ひ。鷺を食ふて吐出さず。時勢に従ふ新奇の膳部。この機に乗じて調ふときは。肉箸に。菜魚の泰山も崩すべく。食匙に。汁の蒼海をも量つべし。嗚呼萬物開化の時。萬情互



に通ずるの術。
此料理通。三卷
の天地人に簡れ
りとせん歟。依
て後に一口を粘
して。以て跋に
換ると云爾。
明治新塾北門社之
食客

假名垣

魯文漫題



安愚樂鍋二編上 一名 奴論建

東京市隠 假名垣魯文戯作

傳染病の新聞に。賣弘めたる牛肉の。功能もむなくならんかと。牛肉舗の主人角を折り。肉を減しちからを落し。林涅爾宇斯土を病たる如く。豫防ぐ手術もなかりしに。他國は知らず掛幕も。あやに畏き。

我邦は。八百萬神達と。親類一家のよしみあれば。忽地例の神風に。吹はらふたる晴天白日。再び盛る牛店の繁昌。別て此頃吉原と新島原の立退に物いふ花の花川戸。賑ふ人の山の宿。ふらるゝ宵もいとはずに。泥に踏こむ田町の素見。往も復るも流行の。牛肉で杯一ぱくつく腹組。牛の小便十八黨。むすぶ交り健兒の社中。文明開



化のざんざりあたまた。王政復古の物髪頭。因循姑息の半髪額。歌妓は箱持の案内に属。娼妓は引手の家婢にひかれ。老若男女の差別なく。此處に一群かしこにふたくみ。三人よれば呼出しの。揚代三十六匁。當時改うしなふ智慧の割前勘定。腎薬もちちた経験は。これから直に人力車。元地がわるけりや花川扉と。浮た駄洒落の口車。ちよんきなホイと押出す。あとはおさけと生の鍋。まづ先さまはトきりの。替るゝの人心。所謂のぞき機關ならん歟。作者の口調は三馬。さてこれよりはんもんしのそのため口章。

チヨン~~~~~チヨン~~~~~チヨン~~~~~チヨン~~~~~チヨン~~~~~

○娼妓の密肉食

▲年のころは二十四五しやことかいへるあたまたにむすびまへがみからいつすんぽうへのかたはかんざしすれにてはげまゆげさかだちうつくしけれどしぜんとはわしくもつともいかつきせいらいなりあみちんのおめしちりめん一ツにゆはんはなにやらわからねどえりはきぬちよみのうすねすみにかりがねのめやうおひはきとこものにてちやはおたのいづばんどこをくるくすまきかつがねのめやうおひはきとこものにてちやははりしと見えて目をすへうでまくりをしはなんをいぢくなくひつけ上段だもひがまはらず作者かんがふるにこのをなん田町あたりへたんにてききあはるふうていたどもひがまべしさいけんのくらいつけは山がたにう仲のやばんやものにおもひつくとちてぜんあきふきとこのにきやくかへとのびのものやばんやものにおもひつくとちてぜんあきふきとおよばずきやくからもちたるだうしやながあるあしひくはかきをはいたさうげのはしまでみなせしやす。つじやなどいふ七ツやへまげこみちやわんげのあをツきりだつそうしやうかすみかへでやうかとかんがさかいやうかあひ風がきいたのがきいて田まきちやちや屋の女中をつれだしていんねんのある客のころへおしかけてゆきなやうたりけりしやへはいりてゆふべからのきうくつづく。「ネエおはねだんおまへまへだが伊賀はんといふ人もあんまりひけうなひとじやアないかこのせつかみがたから藝子とか舞子とかだつたねてきたのでわちきの處へはばつたり足がとまつたからそのはずじやアあるけれどせつくとくるじぶんにやアアレ身請をしやうの親元へかけ合つてもらひ引をする

のとむりわうじやうにわちきのからだへ疵を付たり證文をかゝせたりしたくせにたるづけができたからモウよはねへといふふうで私たちの道をきつたやうでサ。こんどやけだされたからたづねてゆきやア留守をつかつて中やどのにかいへあげつばなしの客人を見たやうにさんくばらまたせたあげ句がとりこんでゐてあはれないからいづれ茶屋迄たづねるからとサ。わちきやアあんなよとくれな奴をこれまで取とめたのはおツちやんの一件から仲の町中のひやうはんもわるくなつたしなじみのきやくははなれてしまつたし自分がすゑしやう斯と定めて取ておきにしておいた作さんもだれかにしやくられたと見へて來なくなつてしまふし着物が無服で初會にもでられないしまつの處へ初會で馴染だから出てくれとおまへの處のおかみはんがいつてきてくれたからひけてからとこへまはつて見るとやアとこせの初坊がねつびやうをわづらつたやうなきやくじんでざんぎりのなかのよりツからしでしみくつらうござんしたけれどおまへの内のお客だしことに初なじみだからとおもつて目をねむつてつとめるとはだしつツこくしじう手いたづらをしたりちからづくでおびを解いたりじつにたまらなかつたヨモウノあんな小うるせへきやくはつとまらないからことはらうかとおもふとたんへおつちやんのところからおかねを五兩ばかりかしてくれる駐春亭で頭取であひとの一座だから金がたりないでひよつとはちをかくといけないからぜひくたのむとつかひをよこされたけれどアノ人にも是度といれあげて質にやるものは小の町さんの名なりからあなめどんのかぶろの着がへまでおきつくした處ぎますから五兩どころか壹分のさんだんもできやアしないはネしあの人肌合なしやうばいをしてゐるからさだめしかほづくにもかゝはるだらうしまんざらくめんができないといつてやつたらはたらきのない女郎とあひそをつかさされるのはしれきつてゐるからじれツたくツて小の町さんにさうだんをする



きもアノ人ゆるじやア茶屋しゆにやアあいそをつかさされるお客はしくじつてしまふし四年ごしいゝ人にとつてゐた作さんまでなくなつてすつぱだかに成たからにやアたとへずみかへに出て小格うへ下ツてもあいとげやうと思ひこんだものを今さらわづかの金銀づくでありそをつかさされるのはざんねんでならないし。トいつてほかにさんだんのしかたもなし年季もきふにやア入れられないしどうしたらよからうと一寸のがれにあとからもたしてあげるからとつかひをかへ

あのひとのいふにやアおいらんエてうどいゝきれめだからできないといつてことはつておしまひなんし年もいかないわちきの口からしつれいざますけれどあの人とながくあひびきをしなんしちやアおいらんの身がつまるばかりでスからどうぞこれをさいはひにきれておくんなんしといつてくれたのぎますからわち